

各党の州別獲得議席数										各党州別得票率の推移										
党名	進歩保守党		自由党		新民主党		その他		合計		党名	進歩保守党		自由党		新民主党		社会信用党		
	議	席	議	席	議	席	議	席	議	席		議	席	議	席	議	席	議	席	
ニューファンドランド	4	3	2	3	4	4	1	7	7	7	49	43	30	45	46	36	5	9	30	4
プリンス・エドワード島	3	3	4	1	1	1	4	4	4	4	52	49	53	40	46	41	7	4	8	3
ノバスコシア	11	8	7	1	2	2	1	11	11	11	53	47	45	34	41	35	12	11	19	8
ニューブランズウィック	5	3	4	5	6	6	1	10	10	10	45	33	40	43	47	45	6	9	15	6
ケベック	2	3	2	56	60	67	15	11	75	75	17	20	13	49	51	63	6	6	5	24
オンタリオ	40	25	37	36	55	32	11	8	95	95	39	35	44	38	45	31	21	19	21	16
ケベック	8	9	7	2	2	2	3	2	5	5	42	47	45	31	25	24	26	23	33	1
ケベック	7	8	10	1	3	5	2	4	13	13	37	36	42	25	31	20	36	31	37	2
ケベック	19	19	21	4	8	1	11	2	19	19	58	61	67	25	25	20	14	9	10	3
ケベック	8	13	19	4	8	1	11	2	23	23	33	42	44	29	33	23	35	23	31	1
ケベック	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	39	38	33	30	28	33	29	33	33	3
ケベック	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	35	35	36	36	42	40	18	15	18	5
ケベック	109	95	106	114	114	31	26	16	262	262	39	42	42	40	40	18	15	18	8	4
北西準州	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	35	35	36	36	36	36	36	36	36	4
合計	109	95	106	114	114	31	26	16	262	262	35	35	36	36	36	36	36	36	36	4

数字はすべて四捨五入。今年の選挙結果は非公式の数字であるが、あまり変動はないはずである。

きたし、国をひとつにまとめ、特にケベックの分離をくい止める上でまかせることのできるの、トルドー氏以外にない、と主張した。

ジョー・クラーク氏は、結果は別として、自由党にとって最大の資産であった。一九七六年の進歩保守党大会で、突如党首に選ばれたクラーク氏は、無名に近い存在ではあったが、党内各派をまとめ、た。しかし、一般の人々にはまだなじみ

がなかった。彼の演説はうまくないし、動作も大して信頼感と呼ぶものではない。支持者さえ、クラーク氏は機略の人ではないし、やる気は十分なのだが、カナダの諸問題にどう対処するかについては、深い確信はない、と認めるほどである。彼がリーダーになつたのは、組織家であつたからであつて、哲学者だつたからではない。彼は本ではなく、グラフを読んだ。こうした彼の弱点に、モントリオール・スター紙などの支持者は、選挙運動の期間中、「ジョー・クラーク氏は多くのすくれた資質に恵まれた政治家であるが(中略)、指導力がいまいで、信念はぐらつき、理解力も浅い」と懸念を、試験を受ける前に生じさせている」と心配していた。トロントクロージャー・アンド・メール紙の敏腕コラムニストで、トルドー氏追い落としに熱心だつたジョー・スライアソン氏は、次のように書いた。

「ジョー・クラーク氏のことで気になるのは、きわめて重要な問題でも常套的な文句で処理しようとする彼の態度だ。(中略)原則を嫌がるのも、だんだん気になつてきた。クラーク氏が原則を嫌うのは一、二の理由があるとは想像する。ひとつは、単にいかなるグループの選挙民も怒らせたくないという、便宜主義である。第二の理由は、クラーク氏自身がどういふ方向に進みたいのか、何を達成したいのかはつきりしない、ということである。彼の人生体験はほとんどすべて政治州首相が一堂に会し、連邦の首相が給仕主任のように動き回つて彼らから注文を受けるだけで、カナダの権益はひとつも守れない」

給仕主任と呼ばれたジョー・クラーク

独自の思想というものがまだできていないのである。クラーク氏は首相になりたがつている。自分ではトルドー氏より立派に国を治めることができると思つている。しかし治めるといつても、どういう相(選挙運動ではクラーク氏を応援した)を含む保守党チームの選出を呼びかけた。保守党は選挙運動を、クラーク氏ではなく、自由党の成績と懸念(な)は、支出を増やして赤字を減らすといふような、いくらか矛盾する(公約に焦点を当てようとした。クラーク氏がせんたく好きな報道陣につかまらず、失態をあまり演じないようになせ、というのが選挙参謀たちの願ひだつた。彼らが三党首のテレビ討論にしぶしぶながらも賛成したのは、クラーク氏は憶病だと非難されたからである。彼らがちゅうちよしなのも無理はない。テレビ討論の結果は、クラーク氏がどうん尻、というのが報道機関のほとんど一致した評価だつたからである。

私の直観では、結果は選挙運動が始まる前に決まっていた。トルドー氏はクラーク氏に対する多くの人々の懸念を代弁していただわけであるが、英語系カナダ人は変化を求めていたし、それにかけてみよう」と決心していた。そういう意見が圧倒的であつた。

選挙の結果、自由党の得票数は、ケベックを除くすべての州で落ち込んだ。選挙の結果を左右するオンタリオ州とブリティッシュ・コロンビア州では三〇パーセントも減り、またサスカチュワン州では三六パーセントも減つた。フランス語系住民がきわめて多いニュー・ブランズウィック州を除く大西洋沿岸の諸州では